

Title	日本語学習者は日本語スピーチをどのように評価するのか
Author(s)	黒崎, 佐仁子
Citation	聖学院大学論叢, 第 27 巻第 1 号, 2014.10 : 187-196
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=5073
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈研究ノート〉

日本語学習者は日本語スピーチをどのように評価するのか

黒 崎 佐仁子

抄 録

日本語によるスピーチコンテストは、日本国内外を問わず、活発に実施されている。日本語教師は、スピーチコンテスト参加者が原稿を執筆している時や発表練習をしている時に、支援を求められることがある。スピーチコンテスト参加者のオリジナリティーや個性を尊重するならば、日本語教師には、彼らがどのようなスピーチを良いと評価し、悪いと評価するのかを把握する必要がある。本研究は、日本語学習者、日本語母語話者、日本語教師に、スピーチの評価についてインタビューした結果を提示するものである。

キーワード；スピーチ，日本語学習者，評価，ベトナム人，インタビュー

1. はじめに

日本語弁論大会、日本語スピーチ大会等の名称で、日本語非母語話者が日本語でスピーチを行い、それを審査員が順位付けし、賞を授与する行事（以下、「スピーチコンテスト」とする）は、日本国内外を問わず、盛んに行われている。例えば、国際交流基金、国際教育振興会等が主催する「外国人による日本語弁論大会」は、2014年5月に第55回が開催され、さいたま市、さいたま観光国際協会が主催する「さいたま市外国人による日本語スピーチ大会」は、2014年2月に第12回が開催されている。国外では、2013年11月に第22回「アンカラ日本語弁論大会」、2014年1月に第8回「全中国選抜日本語スピーチコンテスト」が開催されている。

このようなスピーチコンテストが開催される趣旨は、「日本の社会や文化に日頃から深く接している世界各国の人々に、日本語でスピーチをする機会を提供することは、それを聞くすべての人に対して、そして発表する本人に対しても、新たな視点を与えてくれる好機」「違いを知り、違いを楽しむことこそ、人類の平和共存・発展へ繋がる」⁽¹⁾ という国際理解の促進や「日本語学習の意欲を高め、日本への理解を深めてもらう」⁽²⁾ という日本語学習への動機付けの強化及び日本語教育の普及である。

大小さまざまなスピーチコンテストが計画され、無事開催できている背景には、日本語教育に関わる者の日本語学習者への参加呼びかけや原稿執筆支援および発音指導などがある。いわゆるスピーチの支援・指導は、日本語教師が担うこともあるのである。そして、日本語教師は、日本語学習者が執筆した原稿をどこまで修正すべきなのか、発音はどこまで矯正すべきなのかを、オリジナリティーや個性の尊重、多様性の受容等と照らし合わせながら頭を悩ませる。スピーチコンテストが、スピーチを順位付けし、講評し、賞を授与するものである限り、スピーチコンテストの参加者もスピーチの支援・指導を行う日本語教師も、良い結果を残したいと思うが、結果を意識しすぎると、参加者のオリジナリティーや個性を無視することにもなりかねない。そこで、本稿では、オリジナリティーや個性を尊重したスピーチ支援・指導には何が必要であるかを考察する一歩として、スピーチの評価に注目することにした。

スピーチコンテストでは、審査員によってスピーチが順位付けされる。審査委員には、日本語母語話者や日本語教師が選ばれることが多い。では、このような審査委員が良いと思うスピーチと日本語学習者が良いと思うスピーチは同じだろうか。日本語の能力があまり高くない日本語学習者も、日本語母語話者や日本語教師と同じ視点、基準でスピーチを評価するのだろうか。日本語学習者がどのような視点、基準でスピーチを評価するのかを把握しないまま、スピーチ原稿の修正、スピーチの支援・指導を行っているのでは、オリジナリティーや個性の尊重はできない。本研究では、評価に着目し、日本語学習者、一般日本人（非日本語教師）、日本語教師が、どのような視点や基準でスピーチを評価するのかを考察する。

2. 調査

2.1. 調査実施時期および場所 2014年5月 日本国内

2.2. 調査手順

調査は、以下のように行った。

- i. 調査協力者に、メモを取りながらスピーチの録画データを見てもらい、順位付けをしてもらう。
- ii. 調査者が調査協力者に、順位の理由をインタビューする。

i, ii は共に、個別に行った。また、ii は i のすぐ後に実施した。インタビューは、約 30 分であった。

2.3. 調査資料

日本語母語話者に留学生になったつもりで、原稿を執筆し、スピーチをしてもらった。このスピーチは、大学の授業内で行ったものの一部であり、スピーチをした日本語母語話者の許可を得て、調査資料にした。スピーチは、授業履修者を聴衆として大学の教室で行っている。スピーチ時間は約

表1 スピーチ概要

	国	タイトル	内容
スピーチ1	中国	世界をつなぐ架け橋	観光ガイドをしていた日本人の祖母のように観光ガイドになりたい。
スピーチ2	中国	日本に来て分かったこと	日本人の謙虚さ，大学生のアルバイト，日本語の省略表現が不思議だ。
スピーチ3	中国	震災から見た日本	震災の際に親切にしてもらった経験やメディア報道で見たことに感動した。
スピーチ4	インド	日本に来て驚いたこと	水道水が飲めること，街がきれいであること，道案内してもらったことに驚いた。
スピーチ5	台湾	私が日本で学んだこと	日本留学で，日本語が上達し，シェアハウス生活で貴重な体験をした。

5分である。テーマは、「世界の中の日本」「私の主張」「私の異文化体験」「未来の私」とした。これは、聖学院大学で毎年開催している「留学生日本語弁論大会」と同じ条件である。表1は、スピーチの概要をまとめたものである。

表1の「国」とは、発表者が想定した出身国であり、実際には、いずれの発表者も日本語を母語とし、日本で育っている。

2.4. 調査協力者

調査協力者は、日本語学習者5名、日本語母語話者（非日本語教師）5名、日本語教師5名である。調査に際しては、調査協力者に調査の概要を説明し、調査協力依頼書に署名をもらった。表2は、日本語学習者5名の出身国、性別、年齢、日本語学習の開始時期、来日時期をまとめたものである。

表2 日本語学習者

日本語学習者	出身国	性別	年齢	日本語学習開始時期	来日時期
a	ベトナム	男	10代	2012年10月	2012年10月
b	ベトナム	女	20代	2012年4月	2012年4月
c	ベトナム	女	20代	2010年4月	2012年4月
d	ベトナム	男	20代	2012年10月	2012年10月
e	ベトナム	女	20代	2012年10月	2012年10月

本研究で調査を依頼した日本語学習者5名はいずれもベトナム出身で、日本語学習歴は4年が1名、2年が1名、1年半が3名であり、来日時期では、2012年4月が2名、10月が3名であった。

表3は、日本語母語話者5名の性別、年齢職業をまとめたものである。

表3 日本語母語話者

一般日本人	性別	年齢	職業
f	女	20代	大学院生
g	男	20代	大学院生
h	男	40代	会社員
i	女	40代	会社員
j	男	60代	無職

表4は、日本語教師の性別、年齢、母語をまとめたものである。

表4 日本語教師

日本語教師	性別	年齢	母語
k	女	40代	日本語
l	女	40代	日本語
m	女	50代	日本語
n	女	40代	中国語
o	女	30代	韓国語

調査協力を依頼した日本語教師のうち、k, l, mは日本語を母語とするが、nは中国出身の中国母語話者であり、oは韓国出身の韓国母語話者である。

3. 結果

インタビューを文字化し、調査協力者がどのような視点でスピーチを評価していたかを考察する。

(1)は、調査協力者bのインタビューの一部である。

- (1) ①あの人は、スピーチする時あまり見ていなかった。私は、スピーチは、しっかり覚えています。と思って。あの人は、スピーチする時は、紙があまり見ていなかった。だから、私は、そうだね、スピーチはできた。あのスピーチは、私なら、スピーチ話します。読むじゃないから、あの人はいいと思います。②もう二つ目は、声もよくでき、聞こえた。③内容は普通の内容だったけど、留学生にとって、あの内容はいいと思います。

(1)では、①の部分で、聴衆へ視線を向けているかについて、②の部分で声ついて、③の部分で内容について言及している。(2)は、調査協力者lのインタビューの一部である。

- (2) ④はっきりした発音で聞きやすくて、⑤ある程度アイコンタクトもしていて、⑥抑揚を付けて、大事なところとかが分かりやすかったところが、良かったかと思っます。

表5 分類キーワード

大分類	小分類	キーワード
どのように話すか	音声	話し方 声 声の大きさ 発音 はっきり言う 滑舌 聞き取りやすい はっきり聞こえる 聞きづらい 聞きにくい 聞こえない 速度 ゆっくり スラスラ 滑らかさ 話しかけている 語っている トーン つっかえる 噛む つまる 一本調子 朗読調 ひとりごと 読みながら話している 棒読み たどたどしい
	態度	視線 目線 アイコンタクト 原稿を見ない 紙を見ない 聞いている人を見る 観客のほうを見ようとしている 原稿を見る 紙を見る みんなを見ていない 暗記 覚えている 覚えていない 手を動かす 体が動く ちゃんと立っている 表情 笑顔 冷たい顔 直立不動 髪を触る 鼻をこする
	構成	構成 統一性 まとまっている 内容が飛ぶ 三つの点をあげる 箇条書き 最初に挨拶 最後にご清聴ありがとうございました つながり
	日本語の表現	表現 デスマス調 書き言葉 話し言葉
何を話すか	内容	内容 中身 テーマ 動機 論理的 期待 視点が他の方と違っている 深さ 主張 退屈 新鮮味 斬新 目に浮かんだ 具体例 具体的 薄っぺらい 本人の感じた感想 聞いたことがある 私もそう思った これのほうが大切 合っている 私 の感じと同じ 意見

(2)の④⑥の部分、「発音」、「抑揚」について、⑤の部分「アイコンタクト」について言及している。

このように、インタビューで言及されたことを分類すると、「音声」「態度」「構成」「日本語の表現」「内容」の5つに分けることができる。そして、これは、「どのように話すか」「何を話すか」に大分類できる。表5に、分類の際のキーワードをまとめる。

以下、「どのように話すか」と「何を話すか」に分けて考察する。

3.1. 評価基準

表6は、調査協力者がどのような基準を用いていたかをまとめたものである。

○は、インタビューで言及されていたことを示す。何について言及しているかは、日本語学習者、日本語母語話者、日本語教師の調査協力者のいずれでも個人差が見られた。

表6 評価基準

調査協力者	どのように話すか				何を話すか
	音声	態度	構成	表現	内容
a	○				○
b	○	○			○
c	○	○			○
d	○				
e	○				○
f	○	○	○		○
g	○	○	○		○
h			○		○
i		○	○		○
j	○		○	○	
k	○	○	○	○	○
l	○	○	○		○
m			○		
n	○	○			○
o	○	○	○	○	○

3.2. 「どのように話すか」

日本語学習者5名は、いずれも「音声」を評価基準にし、「構成」「日本語の表現」を評価基準にしていなかった。「音声」を評価基準とするのは、日本語母語話者、日本語教師にも見られることである。しかし、日本語母語話者5名、そして日本語教師の4名が言及する「構成」に関しては、日本語学習者は誰も言及していなかった。一般日本人および日本語教師は次のような言及をしている。(3)は日本語母語話者h、(4)は日本語教師oが構成について言及したものである。

- (3) 最初に3つありますって言ってから始めたから、終わりが見えて、いつまで続くんだろうと思わないですんだ。
- (4) 驚いたことを3つにまとめて、まず、次に、そして3つ目にと整理していたから、次のポイントが出てくるのを予測しながら聞いた。

また、日本語母語話者1名、日本語教師2名は、「日本語の表現」について言及しているが、日本語学習者は誰も言及していない。(5)は一般日本人j、(6)(7)は日本語教師kが「日本語の表現」について言及したものである。

- (5) 何々だった、何々していた、しているというような、なんて言うのかな、デスマス調ではなく、何か文章を書いたものを読んでいるという感じですね。
- (6) 体験から見えてきたことが親しみやすいことばで語られていたからです。

(7) ずっと書き言葉で話してて、ところどころだけ丁寧語になっていた (略)

日本語学習者5名が「構成」「日本語の表現」について言及しなかったのは、日本語の知識不足によるものとも考えられるが、知識はあるが、それを評価に結びつける必要はないと考えていた可能性も考えられる。

3.3. 「何を話すか」

表7, 表8は, スピーチ2およびスピーチ3の順位である。

スピーチ2は, 日本語学習者2名が1位としている。しかし, 日本語母語話者および日本語教師には1位を付けた者はおらず, 日本語母語話者1名, 日本語教師1名が5位を付けている。

表7 スピーチ2

	日本語学習者					一般日本人					日本語教師				
協力者	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o
順位	1	3	1	4	2	4	4	5	2	3	5	4	2	3	4

また, スピーチ3は, 日本語学習者3名が5位としている。これに対し, 日本語母語話者1名, 日本語教師1名が1位を付けている。

表8 スピーチ3

	日本語学習者					一般日本人					日本語教師				
協力者	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o
順位	5	2	5	2	5	3	2	1	4	2	2	2	4	4	1

このような差が生じた理由を「内容」から考える。(8)(9)は日本語学習者 a, c がスピーチ2について言及したものである。[] 内は, 筆者が書き加えたものである。

- (8) すばらしいです。(略) [「一番不思議なのが, 一つのことばでたくさんの意味を持つところ。」「大丈夫」や「いいよ」等のことばは二つの意味を持ちます。] というスピーチの部分について] 日本のことばは, いろいろな意味ありますね。
- (9) 彼女は, みんなを大好きなものですか, 悪いものですかと聞きました。[スピーチ内容に, 肯定的な部分と否定的な部分の両方があったと述べている。]
- (10)(11)は, 日本語母語話者 h, 日本語教師 k がスピーチ2について言及したものである。
- (10) 周りに対して主張しないとか, 遠慮するだとかは, 中国でも同じようなことはあるんじゃないかと思うんですね。あるいは, 日本でなくても, アメリカであるとか, 他の外国のことでも, 人がどういうふう考えているか, ということを読んでいくということは, 大人になるにつれ

て、どこでもあることだと思うので、それを日本の特性と思って接してもらおうと、それはちょっと困るような気がします。

- (11) 一番大きな減点ポイントは、あんまり、客観性に欠けるようなことば述べられていたことです。たぶん、国との違いを言っているのは分かるんですが、それにしても、非常に一面的な見方で、説得力がなくて、構成的にも、説得するような構成になっていないなと感じました。

(8)(9)から、日本語学習者 a, c は、スピーチ2の内容に対して共感を示し、自分もそのように思ったことがあるという経験の共有を良い評価につなげている。これに対し、(10)(11)は、スピーチ2の内容は、日本でだけ経験するものではないと述べ、内容を悪い評価につなげている。つまり、日本語学習者 a, c は、個人の視点で経験を語ることを良いこととするのに対し、日本語母語話者 h, 日本語教師 k は、日本という環境に特化した経験を語るべきであると考えていると言える。

(12)(13)は、日本語学習者 a, e がスピーチ3について言及したものである。

- (12) ちょっとこれは広いことから、あるか分からない。(略) 地震のため、なんか、やりたいことがちょっと難しい。

- (13) 内容は、話すは、全部関係ありません。(略) 日本が好きとか、これ、関係ないです。

日本語学習者 a は(12)のように述べ、話していることが大きすぎて、実行不可能だと主張し、日本語学習者 e は、震災のことをテーマにしているのにも関わらず、震災以外のことばかり話しているとして、評価を下げている。

(14)(15)は、日本語母語話者 h, 日本語教師 o がスピーチ3について言及したものである。

- (14) 日本にいて、何をしたいかというのを基準にしたらいいのかなと思いました。(略) 日本大震災で日本のことを見直したというようなことを話していたと思います。動機がはっきりしていたことが一番に選んだ動機です。

- (15) 最終的に自分の主張がはっきりしていた。結論部に来て、こう、見えてきたのが、これでしたということが明確であった (略)

日本語母語話者 h は「見直したというようなことを話していた」、日本語教師 o は「見えてきたのがこれでしたということが明確」のように、何を考えたのかが結論に出されていることを評価している。ここから、日本語学習者 a, e は、今後何をどうしたいのかという具体的な行動について話すべきだと考えていたのに対して、日本語母語話者 h, 日本語教師 o は、何を考えたかを話すスピーチは良いものだと捉えたと推測できる。

以上、スピーチ2、スピーチ3に関するインタビューから、スピーチを内容の面から評価する場合にも、その評価の視点は、日本語学習者、日本語母語話者、日本語教師で異なる可能性があることが分かった。

4. まとめ

日本語学習者、日本語母語話者、日本語教師と調査協力者とし、どのような基準でスピーチは評価されるのかを調査した。その結果、評価基準は「どのように話すか」「何を話すか」に大別され、さらに前者は「音声」「態度」「構成」「日本語の表現」に細分できることが分かった。また、今回の調査では、日本語学習者からは、「構成」および「日本語の表現」を基準に用いているという言及は見られなかった。これは、調査協力者の日本語能力や知識量によるものなのか、あるいは、日本語とベトナム語の違いによるものなのか、考察を深めるには、今後、調査協力者の日本語能力や母語の幅を広くし、調査数を増やす必要がある。また、「内容」を基準とした評価に関しても、日本語学習者は、自分が何を経験してきたか、そして、これから何をすべきかが語られていることを評価しているのに対し、日本語母語話者や日本語教師は、日本という環境に特化した経験や、経験の中で何を考えたかを述べることを評価していることが分かった。これに関しても、調査協力者が15名という少人数では、推測以上の結論は出せない。多様な背景を持つ調査協力者数に調査を依頼し、考察を深めたい。

注

- (1) 国際教育振興会「第55回 外国人による日本語弁論大会」(http://www.iec-nichibei.or.jp/pdf/speechcontest55_youkou.pdf)〈2014.6.17 確認〉
- (2) 日本経済新聞「第8回全中国選抜日本語スピーチコンテスト」(<http://www.nikkei.co.jp/cjsp/index.html>)〈2014.6.17 確認〉

How Do Japanese Language Learners Evaluate Speeches in Japanese?

Satoko KUROSAKI

Abstract

Japanese language speech contests for non-native speakers are held frequently both within and outside of Japan. Japanese language instructors are asked to support learners who take part in the contest while they are making speech drafts and practicing their presentations. If instructors try to respect speakers' originality and personality, they need to know what kind of speech the speakers consider good or bad. This report shows the results of interviews with Japanese language learners, Japanese native speakers and Japanese language instructors about evaluation of the speeches.

Key words; speech, Japanese language learner, evaluation, Vietnamese, Interview